

「**オンブー/アクシオナ本社キャンパス**」 Madrid, Spain

設計=フォスター+パートナーズ

参照 | 本誌 pp.4-21

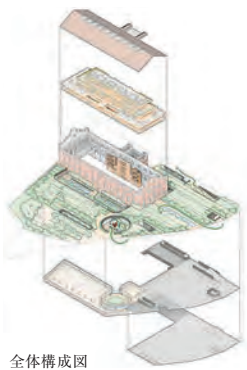
## フランチェスコ・ダルコ

アクシオナ社の歴史は20世紀初頭に遡る。当初の活動領域は鉄道であったが、後に建設、海運、運輸の分野に手を広げ、最近ではエネルギー分野に進出した。再生可能資源に基づくエネルギー生産におけるグローバルなプレイヤーの役割を鑑みれば、同社が新本社の設置を決めたことは納得がいく。そこでアクシオナ社は再利用の建設計画に狙いを定め、温室効果ガスの排出削減に貢献する諸設備の実現、生物多様性に配慮した循環経済における自社の熱意と責任を伝達し定義するために、リユースが最も適切であると考えた。2017年にアクシオナ社は、20世紀初頭(1903年以後)に工業ガス化設備会社

(Sociedad Gasificadora Industrial)によりマドリードのオンブー通りに建築家ルイス・デ・ランデナヨの設計で建てられた、広大な小屋型工場を含む産業施設を購入した。それまでマドリード近郊のアルコベンダスに置かれていた本社工屋(本誌p.5、Fig.1)の外観と、本稿で紹介する、フォスター+パートナーズがオルティス・レオン建築設計事務所と協働で実現した新しいオフィス建築の外観を比べれば、アクシオナ社が同社を雄弁に表現する模範的な作品を実現するという意図に、いかに突き動かされたかを理解するのは難くない。そのような意図から、約20,000m<sup>2</sup>の面積を用いて、20世紀の工場建築の中に新オフィスを整備し、屋外空間を再編する決定が生まれた。タービンがいくつも置かれた既存の小屋型工場は、フォスター+パートナーズのマドリード事務所が設計した修改築工事の核心を表わしている。これは90×30mの仕切りのない大空間で、現在は4フロアに従業員800人の仕事場が置かれている。もともと建物に使われていた煉瓦を約1万トン



改修前の既存建物

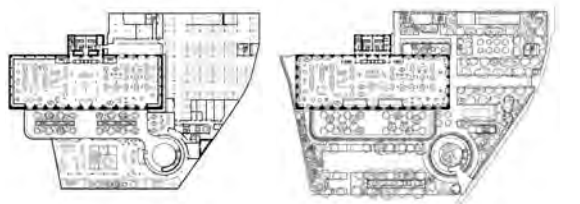


全体構成図

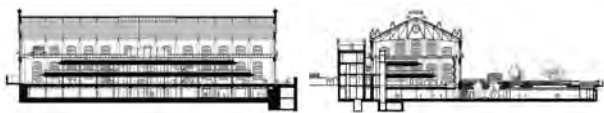
使うことにより、新しい建築の環境への負荷を和らげ、また屋根にトップライトを挿入して自然光と太陽光発電技術の恩恵を得ることができた。屋内は地上階より上が3層、下が2層に分かれており、内部構造はFSC(森林管理協議会)とPEFC[各国の森林認証制度を国際共通基準にするため認証する国際NGO]の規定に従い森林認証を受けた木材(1,600m<sup>3</sup>)を使って建設された。緑地(12,400m<sup>2</sup>)は再植林され、近隣のメンデス・アルバロ駅へのアクセスを保証する——すべてはEUの建築物エネルギー性能緊



正面ファサード:夜景



各階平面図



断面図



改修後の建物および外構

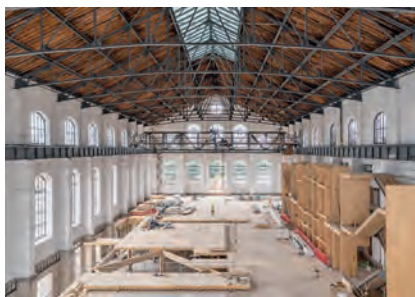
無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。  
©2022 Arnoldo Mondadori Editore  
©2022 Architects Studio Japan



## リフィッティング



大ホール



大ホール内での組立工事



ホール上部を見る



橋形クレーン



修復された鉄柱の柱

急指令 (EPBD) と建築物のエネルギー消費をゼロに近づけるための (NZEB) 諸基準に、適合させるためである。

放棄された建物の修改築に焦点を合わせたアクシオナ社は、自分たちの社是の基盤となる諸原則を表現することを目指した。そのひとつは ESG (環境、社会、ガバナンス) の頭文字に要約される経営基準で、取締役社長ホセ・マヌエル・エントレカナレスの公式発表を読めば分かるように、一般的に、ある企業の質と安定性を自社のエコロジカル・フットプリントを削減する能力と同一視するための基準と言ってよいだろう。フォスター事務所はそれを一種のマニフェストに翻案し、建設技術の解、動線の選択、活用した技術を効果的で驚くべき建築的解に融合させた。外被の修復が終わると、屋内の、かつてタービンが置

かれていた大ホールで木製部材の加工作業が行われた。これはフォスターがしばらく前から進めていた研究の成果であり、2021年にサンテミリオンに完成させたワイナリー「ル・ドーム」(『CASABELLA』927号、2021)がその一例である。大きさの異なる3つの階——厚い床下に設備が収められた——は、かつて機械の移動に使われた橋形クレーンを再稼働させ、すべて木材で建てられた。ホールの長手の壁のひとつに造り付けの棚に似たヴォリュームが設けられ、1階の浮き床に打ち込んだ十字架型の柱で床スラブが持ち上げられている。支柱は空間の縦軸に対して斜行配置された柱・梁構造を支え、格間を回転させた天井のようなものを構成する。そこには素材の自律性のほか、外被に対する構造の自律性が明確であ

る。垂直支柱と梁の結合部は木材の角をわずかに丸めることで視覚的に和らげられ、柱が載るスチール・プレートには縦の薄板が付けられ、近くの鉄道から生じる振動を緩和するために全体が合成材で覆われた。簡素な手摺の連続により、がらんとしたホールに面した壁が各階に造られ、床スラブを斜めの形鋼で補強して視覚的なインパクトを減らした。そこから生まれたのは洗練された大工仕事であり、イタリアの X-Lam ドロミティ社が栗材の建造物すべてを制作し、貢献した。古い建物の内側に唯一の「調度の補充物」として、あらゆる点から見て自律した構造物を建てることにより既存建築を再利用する決定は、作品全体で最も独創的な特質となっている。ただしこれは、現在広まりつつある、既存建築の再利用と資源活用の循環性の追求に向かう傾向のひとつの解釈である。この傾向は、建築遺産の性質、それを構成する多様な部分に付される意味、再利用・修復・保存に関する概念と法規を巡る主流の考えに異論を唱えるものである。そればかりか、需要が拡大して、建築家が伝統的かつ思想的に与えてきた通例の答えよりも、あまり予想されない解答を用意するよう求められるようになったことも示唆するのである。

作品: オンブー/アクシオナ本社キャンパス

設計: フォスター+パートナーズ

設計チーム: ノーマン・フォスター; Nigel Dancey, Taba Rasti, Pablo Urango, Emilio Ortiz Zaforas, Chris Trott, Arpan Bakshi, Martha Tsigkari, Sherif Tarabishy

ローカル・アーキテクト: Ortiz León arquitectos

施工: ACCIONA

構造: ACCIONA

設備: JG ingenieros

ランドスケープ・コンサルタント: K8 Paisajismo

照明: Artec 3

木構造: Enmadera (Miguel Nevado)

ファサード: ENAR (Envolventes Arquitectónicas)

プランニング・コンサルタント: Addient

エネルギー認証: LEED rating Platinum WELL rating gold

建築主: ACCIONA

スケジュール: 設計依頼 2018年/着工 2020年/落成 2022年

規模: 敷地面積 15,266m<sup>2</sup> / 延床面積 19,500m<sup>2</sup>

所在地: C. del Ombú, 6, 28045 Madrid, Spain



「サルヴァニーニ・キャンパス」 Sarego, Vicenza, Italy

設計 トラヴェルソ・ヴィギー・アルキテッティ

参照 | 本誌 pp.22-33

## マルコ・ムラツツァーニ

サルヴァニーニ社は板金加工機械の設計・製造を専門とする企業で、鋼板の曲げ加工、打ち抜き加工、ファイバー・レーザー切断、またそれらを柔軟に組み合わせた加工機械を開発している。50年の間にグローバルな評価を得て、5つの製造工場、23の販売・技術支援事業所を世界各地に置くまでになった。それでも同社は1973年に創業して以来、ベリチ丘陵の麓にあるサレゴに根を張り続けている。本社一帯は徐々に成長を遂げて現在のような中心的生産拠点となり、また同時にグループの経営本部の強化に努めてきた。

サルヴァニーニ・キャンパスの実現——ショールーム棟の再建、アカデミー棟の修改築、駐車場がある正面広場の再編——は、企業の経営本部とサービス施設(オフィス、社員食堂)のあるエリアを再編する大規模な計画の第1段階であり、約2,000m<sup>2</sup>の既存の屋内面積を削減して緑地化することが計画されている。その目的は、環境および社会の「サステナビリティ」の観点から——つまりランドスケープの中の建物群、軽く可逆的な建築、エネルギー自律を重視して——生産拠点と地域との関係を再定義することにある。

キャンパスは、サルヴァニーニのような「インダストリー



アカデミー棟:カフェテリア

4.0(第四次産業革命)」企業に必要な空間の明確な設定をはじめとして、この目標達成に貢献している。まず、ショールームはオートメーション化工場の一種のプロトタイプで、内部ではクライアントや見学者に向けて加工機械と加工製品の見本が展示されている。他方で、アカデミーはオフィス、会議室、教育養成のための教室、スマートワーク設備を再統合した建物であるが、交流や文化活動の場としての「広場」でもあり、150席の劇場と従業員と見学者用のカフェテリアを備えている。これら2つのヴォリュームは2階のレセプション・ブリッジで連絡し、また地上で両



工事中のショールーム棟



工事中のアカデミー棟

者をつなぐパティオは板敷で植込みがなされ、アカデミーからも駐車場横の門からもアクセスできる。想定されるクライアントの訪問ルートは、車を停めたら、屋外スロープを上りレセプションに向かう。そしてロフトからショールームに入り、そこで空間全体を眺めた後、加工品見本の小部屋に降り、さらに機械と加工プロセスのデモンストレーションを見学する。アカデミーでは、クライアントは防音設備の整った部屋で要望を確定し注文を行い、また自前の技術者を養成する教室も利用できる。最後に、カフェテリアの快適な空間で契約書を確認できる。キャンパスの建築



正面全景:左よりショールーム棟、レセプション棟、アカデミー棟



パティオ

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。  
©2022 Arnoldo Mondadori Editore  
©2022 Architects Studio Japan



「ラ・シテ」 Toulouse, France

設計=ピエール=ルイズ・テヤンディエ/TAA

参照 | 本誌 pp.34-45

## アウグスタ・マン

ラ・シテは、トゥールーズにおいて、コ・ワーキングと新企業創出計画を展開する空間と設備を提供する新しい施設である。今後どれだけの人がそこで働いたり、訪れたりするのかは分からないが、彼らはこの場所で起きた魅惑的な歴史の残響に気づくことであろう。ラ・シテが置かれた、小屋型工場の大空間(120m×27m)は3棟で9,246m<sup>2</sup>の面積を占める。これらはかつてラテコエール鉄工・建造所の産業拠点をつくっていたが、1917年に航空機製造に転換され、1944年に空襲を受けて1945年から再建された。創業者のピエール=ジョルジュ・ラテコエールは、フランス航空機産業の発展に決定的な貢献を果たした。彼の企業経営者としての歴史は、エール・フランス社とエアバス社の誕生に至る歴史と絡み合う。エアバス社の本社がトゥールーズにあるのは偶然ではない。ラテコエールは航空便を商業的に発展させた先駆者でもある。ソシエテ・デ・リーニュ・ラテコエール(後のアエロポスタル)はフランスとセネガル、また南米大陸を結んでいた。アエロポスタル社の最も有名な飛行士だったジャン・メルモーズとアントワヌ・ド・サン=テグジュペリは、ラテコエール28を操縦してアンデス山脈を越えた。こうした飛行が何を意味したのかについて、サン=テグジュペリは『夜間飛行』(1931)で語っている。ラ・シテに入る前にこの小説を読み、われわれがよく使うエアバス機の祖先としてラテコエール28に想いを馳せるのはあながち間違いではなかろう。



夜景:メイン・ファサード

ピエール=ルイズ・テヤンディエ/TAAは3つの工場建築を再生させた。多様な増築部を取り去った後にアクセス路を作り直し、特徴的な屋根——ひとつは鉄製——をとりわけ入念に修復し、また頭上からの照明システムを維持し設備工事を行った。外被は、捻りを加えた鋼板を使うことにより、元の輪郭を変えずに透明に変えられた。その狙いはガラス壁を保護し、斜めから見た時

に屋根のフォルムを反復させることにある。屋内では、既存の柱のグリッドを生かしてそこに木構造を挿入し、1階に屋内広場と催事スペースを創り出し、また2階にはオフィス環境が整えられた。この再利用計画の最も特異な点は、建築家たちが、古い工場の内側に挿入された新しい木構造と、何の化粧もなく剥き出しにされた元来の構造的要素の粗い手触りとの落差をカムフラ



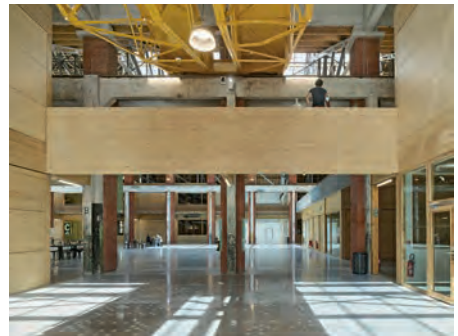
改修前のファサード



メイン・エントランス



大ホールよりオフィス棟を見る



オフィス棟より大ホールを見る

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。  
©2022 Arnoldo Mondadori Editore  
©2022 Architects Studio Japan



## 「『ウォーター・タンク』のサウンド・チャペル」

Cobar, New South Wales, Australia

設計=グレン・マーカット

### 音の空間 ポール・マクギリック

参照 | 本誌pp.56-69

コーバー・サウンド・チャペルは、オーストラリアのニューサウスウェールズ州コーバーにある、恒久的な音響インスタレーションの芸術作品である。2022年に完成したそれは、作曲家でサウンド・アーティストのジョルジュ・レンツと建築家グレン・マーカットの創作物である。

—  
ゲートは「建築は凍れる音楽」と言ったことで有名である。両者は確かにリズム、質感、調和、比例、強弱といった特徴を共有する。さらに好奇心をそそるのは、より理解しにくいものだが、空間の次元である。例えば、音の認知はそれが生じる建築的空間により形づくられる。音楽が特別なクオリティを帯びると感じられる、お気に入りの演奏会場を挙げられない人はいまい。しかし、物理的な次元を超えて、建築と音楽はいずれも情動的で精神的な空間を創出する。それはわれわれが真にくつろぎを感じ、われわれが生きるこの世界と完全な調和を経験する場なのである。

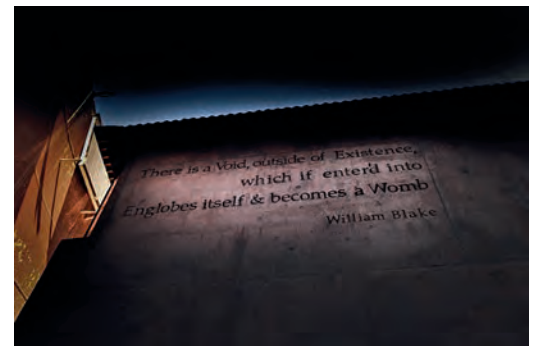
そのような調和は「天体の音楽」という古代の思想の核心にあった。それは音楽と宇宙——音の間隔と星辰を隔てる多様だが秩序の感じられる距離——の間には共通の数学的秩序があると見なす思想である。太陽、

月、惑星といった天体の比例した動きは、弦楽器の弦の長さを変えると別の音が出るのと同じく、一種の音楽を生み出すと考えられた。

このグレン・マーカットの最新のプロジェクトは、クライアントであるオーストラリア人作曲家のジョルジュ・レンツと協働で、没入体験の中に建築と音楽を融合させた。それと同時に、構造物そのものはそれが立つ環境、すなわち果てしなく広がる平原と空と不可分である。現に、サウンド・チャペルのデザインは、鑑賞者に内蔵の拡声器から流れる音楽を、切り取られた空の、特に夜空の眺めと混ぜ合わせるよう促す。オーストラリアでも人里離れたこの場所では、大気はあらゆる環境汚染を完全に免れている。星々ははっきりと光輝いて見える。そして、それぞれの関わり合いに応じて、星はたしかに音楽的な性質を帯びるように見えるのである。

レンツは長年、シドニーから西へ720キロ離れた、金と銅の採掘町だったコーバーに近い、この乾燥したランドスケープと深く関わり、音楽に浸された瞑想的空間という彼のヴィジョンを実現する理想的な場と決めた。まさに遠隔地であることが彼の指針に合致したのは、「文明から遠く離れ、環境しか存在せず、少しばかり行くのが難しい場所を創出」したいと望んだからである。

実現には20年を要したが、地元の議会が土地と、高さ10mの使われなくなった鋼製の貯水タンクを寄贈した時に転機が訪れた。コーバーの議会はさらに、1901年に造られたタンクを取り壊す許可も与えた。ところがレンツは、落書きに覆われた円筒形のタンクを完璧な出発点とすぐさま見て取った。彼は常に「丸いものの中の立方



チャペル壁面に刻まれたW・ブレイクの詩句

体」を思い描いていたのである。さらにレンツにとって、この古い産業遺産は一種のヴァナキュラー建築として、極度に乾燥したランドスケープそのものと同じく場の一部に映り、町の命運がトラックか鉄道で輸送される水に委ねられていた時代を呼び起こした。

グレン・マーカットに声をかけたのは、建築物とそれが占める土地との、新築物とすでに土地に根を下ろしたヴァナキュラー建築との、また居住と場の統合に、永続的に関わる彼の仕事をレンツがよく知っていたからである。レンツは、演奏会場ではない何かを、芸術作品を創りたかったと言うが、さらに彼は「頑強で小さな空間」を望んでいたとマーカットは述べる。

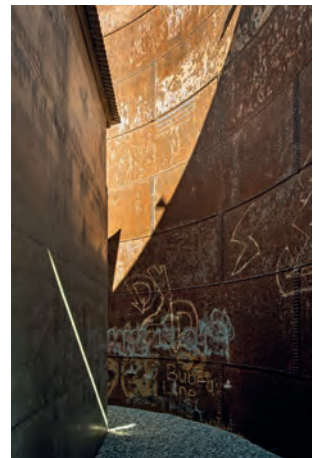
こうして、錆びついて落書きで覆われた鋼製タンクは、内部の挿入物に強健だが優美な鉄筋コンクリートを使うことにより、補完された。敷地はコーバーの町から西に1.5キロ離れており、無舗装の道を昇ってアクセスする。土を掘り返した道は、オーストラリアの隔絶した土地に特徴的な濃い赤色をしている。わずかに大地から高められ



全景



上空より見る



通路